

# お松幻影

神野麻郎

お松様のことを語れとおっしゃるのですか？ もうこんな、耄碌した婆でございますよ。はあ、お松様のお墓に参って来られたのですか。それはよいことをなさいました。なんとなく気持ちが落ち着かれたことでございます。このごろあなた様のような墓参の方々が近在からも徳島のお城下の方からもよくいらつしやいます。ええ、とくに花見の頃には多いですね。あそこの桜はお墓をこしらえてまもなく、お松様がお好みになつていたというので、ご供養のためにどなたかがおそばに植えたのです。年々よく育つて、今はもうあんな大木になりました。毎年春はみごとな花を飾つて、秋は紅葉で、お松様をお慰めしております。

はあ、私めはお墓に日参して、お花の水を取り代えたりお掃除したり、お世話をさせていただきます。お松様にはご生前計り知れぬご恩を受けたということもございませうが、それよりも、私の中ではまだお松様はきちんと生きていらつしやるのでございます。お参りすれば、ああ、お里や、また来たのですか、とお松様は昔と同じような澄んだお声で私に話しかけてくださいます。私もお仕えしながら、気やすくお屋敷のことや自分の身の上、世間に起きているあれこれのことを思いつくままお話しいたします。まなかに浮かぶお松様がいつまでもお若いいらつしやるのがふしぎですけれども。もう古い先短くこの世にあまり望みもない私めにとりましては、それは何より心おだやかな楽しいひとときなのでございます。

はあ、それはもう世は移つて、お松様に馴れ親しんだ方たちも今はもう少なくなつてしまいましたね。詳しく存じ上げている者といえ、もう私めなどしかあまり残っていないかもしれませんねえ。

それではお話し申すといたしましょうか。いささか長い話になりますけれども。

私は子供時分からお屋敷のお松様は器量よしだというおうわさは耳にしておりましてと申しますのも、お松様はこの加茂の村から川下の二つ置いた大野という村のご出身なのですが、私もじつは同じ村で育った者なのでございます。それに私の母方がお松様のご実家の遠縁にあたるそうでございます。とはいえ、歳もちがい身分もちがいますので、子供の私はお姿を何度か道でお見かけしたくらいのことでございます。ただお松様がこちらのお屋敷に嫁がれた日のことは今でもあざやかに憶えております。立派なお行列で、馬にお乗りになつた花嫁衣裳のお松様はそれはそれはおきれいで、子供らはわあわあ囃しながら村はずれまでついてまいつたのでございました。ただその時、大人たちの中に、あんな

に器量よしで引く手あまたのお松様が、よりによつて庄屋さんの後妻に入られるとはなあ、  
と云つて不審がる人たちがございましたが、それがどのようなことなのかは子供の私には  
よくわかりませんでした。その時私はまだ十一、それから二年ばかりして、私がこの加茂  
の村に参つてそのお松様にお仕えるようになるとは思ひもよらぬご縁ではありました。

涙を流しながら家族と別れて初めてお屋敷に上がった日のことは、今でもいろいろ目の  
裏に焼きついておりますよ。大川の澄んだ水の色、山と川に挟まれてこじんまりとした加  
茂の村のたたずまい、道で遊んでいた村の子供らの歌声……。でも、なにせそのとき私は  
まだ十三の小娘でしたから、門をくぐつて庄屋様の大きなお屋敷の中に入るともう、何が  
なんだかわからずのぼせたようになっておりました。見知らぬ大人ばかりの中に入り出さ  
れて、意気地もなく今にも泣き出しそうな顔をしていたかもわかりません。でもまず笑顔  
でやさしく迎えてくださったのがお松様で、そのお顔を見まもりますとなんだか胸のかた  
まりがとけていくように感じられたのでした。

次の日からはもう、お松様や古手の奉公の方々からいわれるままに、お勝手の賄いや水  
汲み、掃除洗濯、野良仕事など無我夢中で働きました。見よう見まねでお針仕事も習いま  
した。庄屋のお屋敷では人の出入りも多く、接待の用意や後片付けや使い走りも奉公人の  
大切な仕事でした。そうしてひとつひとつの仕事をおぼえながら過ごしてあれよあれよと  
いう間に一年ほどが経ちますうちには、お屋敷内のようなすも、旦那様やお松様、私のほか  
に九人もいた奉公人たちの人となりも、それから村のようすなどもだいたいぶわかつてまいり  
ました。

お松様というお方は、そのころまだ二十歳に届かぬお若さだったにもかかわらず、賢く  
て気配りも行き届き、家内の差配いんさちをしつかりとなさつておられました。お言葉もおふるま  
いもお上品で取り乱されるようなことなどは一度もありませんでしたが、かといつて堅苦  
しくはなく、生娘のようによくお笑いにもなりました。そのような人となりとお美しさで、  
会う者はみなおのずと惹きつけられずにはおられないようなお方でした。奉公の者たちに  
対してもふだんはおやさしいのですが、怠慢や曲がったことがあれば厳しくお叱りになり  
ました。そのように凛としておられるのは、お松様が大野の由緒ある武士の家系のお家で  
お育ちになつたからにちがいありません。旦那様はそんなお松様に安心して家内のことは  
おおよそまかせられ、ご自分は公事に専念していらつしやいました。

ありがたかつたことは、私が仕事に慣れてくると、女も多少読み書きができなくてはと  
お松様が暇を見てはご自分のお部屋で手習いをさせてくださったことでした。それで私は  
少しは読み書きもできるよになつて、それは私の一生の宝になつたのございます。遠縁  
にあたるとはいへ奉公人にすぎない私などにお松様があのようにお目をかけてくださった  
のは、きつといちばい年下で何もできない私を憐れまれたのでもありません。お松様は、  
お里は根気がよく利発だから教えがいがあつた、といつてくださいました。時にはお部屋で

話や遊びの相手もおおせつかり、いつかそこをのぞかれた旦那様が、お里はお松の妹のようだと笑っていらつしやいました。

あなた様も存じのように、庄屋様のお仕事というのは年中せわしいものです。この加茂の村は小さいながら、旦那様は庄屋の中でも近郷の八つの村々を束ねる組頭の庄屋様でしたから、そのおせわしきといったら並大抵ではありませんでした。ふだん村内むらうちに起こるいろいろなものごとを差配されながら、一年中田畑の成り具合に気をもまれ、十一月にはお米の、六月には麦のお年貢をご領主の樋口様に収められます。この加茂一村は、樋口内蔵助様の御拝領地なのです。徳島のお城下や富岡のお役所からいろいろなお触れが届けば控えをとって近郷の村々に廻し、またその中身をわが村人に知らせねばなりません。お触れは月に八日以上も届きました。お役所からのお呼び出しもたびたびで、時には藩主様のもとへ羽織袴で出かけられたりもなさいました。組村の庄屋様たちとの談合もたびたびございます。そして公事は何ごともしろいな帳簿に事細かに書き付け、またあちこちへお書状を認めるのは毎日のことでしたから、お屋敷にいらつしやる時はいつもむずかしいお顔をなさって筆をとっておられました。

旦那様というお方は律儀な中にもおやさしさがあり、人を大きく包みこむようなところがおありになりました。在所によっては民のわずかな稼ぎまでむしり取るようなあくどい庄屋がいると聞きますが、旦那様は反対に村の衆をよくいたわられました。村人の間で諍いが起こっても双方から言い分をよく聞かれ、不公平のないよう裁かれました。それでおのずと村の衆も旦那様を敬い、頼りにしていました。ただ、旦那様はお若い頃からのお仕事のご無理がたたったのででしょうか、私が伺ったところは癩のご持病があつて、そのために寝込まれるようなことが何度かございました。それでもお松様がよくご看病なさって大事なく過ぎてはおりました。

お屋敷は先の奥様が亡くなられた後にお松様が見込まれて入られたので、旦那様とお松様は親子ほども歳がちがつておられたのですが、旦那様は娘のようなお松様をいつくしまれ、お松様はまた心から旦那様を敬い、お慕いになつておられました。いまだお子に恵まれない代わりに、お二人はお城下のさる武家からもらつてこられた雌の三毛猫をお飼ひになつて、三毛、三毛と呼んでかわいがつていらつしやいました。姿のよい賢い猫で、私も家の者も大事にいたしました。そのころはまだ村内に猫は珍しかったのですよ。三毛はとくにお松様によくなつき、三つの子供が母親を慕うようにいつもお松様に付きまわつていたものでございます。

しばらくは、お二方のおかげをもつてお屋敷の内は春日のような平穏がずっと続いていくように私には思えておりました。ところがそのころもう、じつは村内では恐ろしいことが進んでいたのございます。前の年は夏に大川の出水があつて不作でした。そしてその年は梅雨に雨が少なく、大川に注いでいる加茂川の流れが不吉に細りました。旦那様は村役

さんたちと談合の上、太龍寺の験者を呼んで八幡様で臨時の雨乞いの祭りをなさいました。村の衆が野良着を着て境内で太鼓に合わせておもしろおかしく雨乞い踊りをしていたようすは、昨日のことに憶えております。でもその甲斐もなく、その秋も不作だったのでございます。

ご覧の通り、この村の田と申ししても、主には太龍寺のお山から流れてくる細い加茂川の水をたよりに大川の川原近くまで段々に作ってある狭いもので、しかも砂石混じりで地味は悪いのです。平素でもお百姓さんたちはかつかつの暮らしで、畑に成り物を作り、お上のお許しをいただいて山菜や川魚を採ってなんとか口を糊しておりました。もともと何年に一度かは大川が暴れて田の半分もが浸かってしまうような土地柄で、そのためにお百姓さんたちの家には蓄えというものがありません。そこを連年の凶作に見舞われたものですから、たいていの百姓家では秋の終りになっても年貢を納めかねました。もしわずかな稔りをお上に差し出してしまえば、自分たち家族が飢え死にしなければならぬほどでした。それで、ふだんはがまん強いお百姓さんたちも、さすがに旦那様に泣きついたのでございます。

村人思いの旦那様にもその難渋はよくわかり、お蔵にあった去年のお米の残りの大半を一部はお百姓さんたちに替わって年貢に出され、一部は食べかねている村人に施されました。その上に徳島のお城下にお住いのご領主の樋口様の所に何度も足を運ばれて村人の難渋を訴え、年貢の減免をお願いしたのでございます。それには樋口様も多少応じてはくださったようですが、でも減免がなくなった額はわずかでした。それではお百姓さんたちは納得せず、血気にはやる者たちは強訴の相談もしているという物騒なうわさも村内に流れました。下からは突き上げられ、上からは押さえつけられ、旦那様は文字通り板挟みになってお悩みになりました。そしてとうとう、ご自分が借銭なさって当座の足らずまいをその金子で納めようとご決意なされたのです。それでご縁戚やらふだん取引のある川下の郷町富岡の商家やらをお回りになったようですが、それはどうも不首尾だったようでございます。思案の末、隣の吉井村の質屋から高利の借銭をなさり、それを樋口様に納められたのでした。困り果てていた村の百姓たちは、旦那様のお慈悲ある計らいに涙を流してありがたがったのでございます。

吉井村の質屋というのは野上三左衛門という土地持ちで、百姓仕事のかたわら近在の人々にお金を貸して高利の利ザヤを取り、長年の間には肥え太って裕福に暮らしておりました。お金のことになるやと容赦ないので評判は悪く、裏では強欲三左と陰口されているようなお人でした。旦那様が三左衛門方におもむき借銭を申し込まれると、三左がそれをうけがってくれたのはよいが、足もとを見透かして高利の上に五反地を担保にするという条件を出したそうにございます。五反地というのは、お屋敷が持っている田地の中でも上々の所でした。ほれ、ここからも少し見えます、あの川原に下る途中の青々とした田、あの

あたりですよ。他に手立てのない旦那様はその法外な条件をしかたなく呑み、樋口様のご承諾を取りつけ、村の五人組にも連署をもらって借用の証文をお作りになったそうにございます。もともと、後の話では、この急場さえしのげば借銭は縁戚知人からの助けでほどなく返せるという算段も、旦那様の中にはおありになったのでございました。

ところがお丈夫ではないお身体、たびたび癩を起こされ富岡の医師くすしがご処方くすしの薬を手放せないでおられたところへ、金策のために相当なご無理をなさったのが祟ったのにちがいない、師走に入ると旦那様はすっかり寝込まれてしまいました。お腹の痛みが治まらず、お蒲団の中で脂汗をかきながら何日もお苦しみになったのでした。またお松様がご心配顔でつきつきりでご看病にあたられました。それでも金策はなんとか捻って、野上三左衛門に返すものは整えられたようでございます。そのころ、太龍寺さんの山伏のご祈祷もいくらか効き目がありましたか、旦那様は数日小春日和のような小康を得られました。旦那様と奥様がやすらかなお顔で、むつまじくあれこれ語り合われる時が戻ったのを見て、私も家の者もいくらか安堵の息をついたことございました。けれどもそれは、ほんの一時のことだったのでございます。

ある日の夕方のことでした。前触れもなくふと野上三左衛門がお屋敷に参りました。近在への所用の帰途、旦那様のお見舞いに立ち寄ったというのでございます。整えた金子を一日でも早く返したいと思っていらいちゃった旦那様は、それはもっけの幸いとお松様に告げて三左衛門をご自分のお部屋に招き入れられました。そのお部屋の中でのことは私どもにはうかがい知れなかったのですが、三左は小半時ほどで座を立てて帰っていきました。後で知りましたことには、その時旦那様はその場で借銭分に利子をつけて三左にお返しになったのでした。受け取った三左は、引き換えにすぐさま借用の証文を返すべきところ、今は手元に持ち合わせないので、明日の朝いちばんに家の者に届けさせると約束したそうにございます。人のよい旦那様はその言葉をすっかり信用せられ、毫も疑われなかったのが、後々の大きな悔いとなったことでもございました。

その夕方のちよつとした一件こそが、それから続いたすべての凶事まがごとの始まりだったのでございます。これも私は後から知ったことですが、翌る日、待てども待てども三左の家からは誰もやってまいりません。「朝いちばんに」と三左はたしかにいったのに、昼時になっても宵が近づいても三左の家からはいつこうに音沙汰がなかったのです。待ちかねて旦那様は長年身近で使われていた源太さんという者にようすを訊きに行かせたのですが、提灯の灯りで戻ってきた源太さんというには、向こうの家の者に訊ねたが三左衛門は遠方まがごとに急な用ができて朝早く出立した、しばらくは戻ってこないだろう、というのです。それでは借用証文の件はどうなったのかと源太さんが迫ると、自分は留守番で何も聞かされていないのでわからないと返答し、埒が明かなかったというのでございました。それを聞いた旦那様はたちまちうち沈まれました。お松様も、それではいたしかたありません、三

左衛門の帰りを待つことにいたしましたし、ようとお慰め申すしかなかったのをごさいます。

三左が旅から戻ってきたというわさが聞こえてきたのは、それから十日も後のことでした。それを聞くや、旦那様は自ら談判に行ってくるかと強くおっしゃられたのですが、お腹の痛みは続き、床から立ちあがるだけでよろよるとなされたので、お松様はじめ回りの者たちがなんとかお止め申し、お松様が名代でいらっしやることになったのをごさいます。その時源太さんと私がお松様に従いました。

吉井の村へは石ころ道の峠を一つ越えていきます。空は曇ってよく冷えこんだ日の昼間で、坂道を歩まれるお松様のお顔の白さと、痩せ細った冬の大川が寒々と光っていたのを憶えております。

三左衛門の家に着くと、だいぶ待たされた後、赤鬼のような面相の三左が玄関に出てきました。お松様が借銭の証文を受け取りにきたとおっしゃると、あろうことか、三左は白を切ったのです。

——貸した金子も返してもらってないのに、なんで証文だけ返さなあかんのですか？

——というのです。呆れたお松様はもちろん毅然として言い返されました。

——返してもらってないとは異なことをおっしゃる。十日ほど前、あなたが拙宅にお見舞いに見えられた折、病床の惣兵衛が手づからあなたに利子をつけた金子をきちんとお返し申したではありませんか。それをまさか、憶えがないとあなたはおっしゃるのですか？しかし企むところのあった三左は知らぬ存ぜぬとくり返すのでした。

——お松さん、あなたはそういわれるが、なんぞ返したという証拠がありますか？惣兵衛さんの部屋での三人だけのひそひそ話、証人もおらんことであらう。そんな見てきたようなことを言われてもワシにはいっとう覚えがない。貸した金を返してもらったらその場で借用証文を返す、世間の道理、金の貸借の鉄則じゃ。ワシもずうっとそうしてきました。ところがあの証文はまだわしの手元にある。なんでか？金を返してもらってないからじゃ。あんた、ワシからの借銭が気になって気になって、そんな都合のええ夜の夢、いいや昼間の夢でも見られたんではないのか。それとも、旦那さんの看病で心身疲れて幻でも見なさったんじゃろ。

とまあ、こんな調子でした。あとは返した、返してもらってないの押し問答、最後には三左が、

——ええい、あんた、しつこいお人やなあ。もういんでください！

と怒鳴ってふいと踵を返して奥の方に引っ込んでしまいました。お松様としては座敷に上がって追いかけるわけにもいかず、かといってそのまま居座るわけにもいかず、むなしく帰途につかれるしかなかったのをごさいます。

お松様のご報告を受けて旦那様も憤慨なさったのですが、ご自分は病の床を離れることもおできになりません。しかたなく証文に連署した村役さん方に来てもらって事情を語り、

加勢を願われました。話を聞いた方々もそれはあまりにひどい仕打ちと怒り、旦那様に味方なさって早速談判に出かけられたのですが、それでも三左はその方々に対しても居丈高に、証文はこっちの手元にある、それが金子を返してもろうてない何よりの証拠、という一点張り、取りつくしまもなかったそうにございます。

そうこうしているうちに年の瀬も迫ってまいりますと旦那様のお加減がさらにお悪く、お屋敷の中が慌ただしくも重苦しくもなつて、借銭の話どころではなくなりました。お松様は富岡町から医師を迎えたり、太龍寺さんの山伏にまたご祈禱を頼んだりしながら自分分はろくに寝もなさらず旦那様に付き添われました。そのころ私どもは旦那様のお加減のみならず、奥様のお身体の心配もしたものでございます。

でもお松様がお手を尽くされたかいかもなく、暮れの二十八日、旦那様はどうとう息をお引き取りになりました。お通夜ご葬儀には、村の衆ばかりでなく遠近からもゆかりの人々が大勢集まられ、ご逝去を悼み、ご人徳を偲びました。野辺送りの日はもう明日が除夜という日でしたが、急に冷え込んで雪が舞いました。それから年明けの三が日にかけて、不幸を鎮めるように毎日雪が舞い、田畑を覆って積もつたのを憶えております。

それらのうち沈んだお屋敷の日々、お松様はお通夜ご葬儀の時も人前では一度も涙をお見せになりませんでした。それを薄情と陰口をたたく人もないではなかったのですが、そうではないことはおそばに仕えている私どもがいちばんよくわかっておりました。お松様は昼はろくにお食事もとられず、夜は夜通し仏間でお燈明の灯をお一人で守っておられました。三毛が、そのお松様をお慰めするようにいつもそばに侍っておりました。お一人の時には泣かれても、人前では情を抑えられるのが、お武家式の作法なのでございました。

村じゅうが喪に服しましたので、その年の正月ばかりは暦の上だけのものになってしまいました。家々では内々で目立たぬように新年の祝いはしていても、いつもの正月の八幡様への参拝姿も、川原や野辺で晴れ着を着て遊ぶ子供たちの姿も少しも見えず、淋しいものでございました。それでも三ガ日が過ぎると、お屋敷ではまた村役さんたちや縁戚の人々の出入りが多くなりました。たいていむずかしい顔をなさつてやつて来てはまたむずかしい顔でそそくさと出ていかれました。当時の私にはうかがい知れないことでしたが、家の相続や庄屋の公事のご相談をなさつていたのでと思います。それにあの強欲三左からの借銭の件の始末もあらためて話題になったでしょうか。私もそうでしたが家内の者たちは皆、野上三左衛門の強欲が旦那様のご寿命を縮めたと思ひこんで、三左衛門を恨み憎んでおりました。屋敷内ばかりか村の衆も口々にそううわさしておりました。

お松様をご仏前やお墓をお守りする日々は続き、七日ごとのご法要がしめやかに営まれました。七七日が過ぎるころには、もう里は桜がにおい、大川がなめらかに光る春になっておりました。田を牛が鋤き返し、山すそや川の土手で山菜を採るいつもの村の春が、旦那様がいらつしやらなくてもまた巡ってきたのです。お屋敷内でもお松様を中心にしだい

にふだんのように復しました。お松様のお顔にもようやく笑みが戻ってこられたのでございます。

ところが、七七日が過ぎるのを見透かしたように、強欲三左の所から使いがやってまいりました。お松様が応対されたのですが、用向きは恥も知らぬか、借銭の返済の催促だったのでございます。返済の期限が近いから、忘れるなど。

それでお松様はまた三左衛門の家に直談判に出かけねばならなかったのでございます。問答のぐあいは前と同じで、金子は返した、いや返してもろうてない、証文をこちらに渡してください、いや渡すいわれはない、といった調子で埒があきませんでした。それに三左の調子は、もう旦那様の後ろ盾がないと軽く見てか、お松様に対して遠慮も容赦もなかったのでございます。脂ぎった顔を醜く歪めて、

——期限はもうすぐじゃ。わかっておりますな。期限までに返済のない時は、担保に指されたあの五反地、証文通りにしかと受け取らせてもらいますからな。

お松様は引かずに、どちらがウソをついているかは明々白々、五反地は渡せない、渡すいわれがないと抗弁なさいます。すると三左は急に猫なで声になって、

——お松さん、まあ、五反地を渡せんというんなら、代わりにあんたでもかまわんよ。あんたはいつまでもきれいなじゃ。庄屋さんの後添えには惜しいと思うとつた。まだ若いじゃから、後家はさびしいはずじゃ。一年の喪が明けたら、わしがあんたの面倒を見てあげよう。このこと承知なら、むろん借金は返さんでもええ、五反地もそのままにしときましょう。どうです、あんたの方にとつて悪くない話じゃろう？ 三方よしの話じゃ。

と、けしからぬことをいいたしたので。さすがにお松様も激昂なさいました。

——けがらわしい！ あなたはよくもそんなことを。よろしい、私はあなたの悪たくみをお奉行所に訴え出ます。お奉行様の前で黒白をはつきりとつけましよう。天地神明がご覧になっているのです。村役の方々も味方してください。あなたは騙りの罪で牢屋に入られますよ。このお家もつぶれますよ。それでもよいのですか！

こんなふうに迫られました。それでも三左はどこふく風、

——ああ、ああ、あんたがそんな気持ちだったら、どうぞごずいにお奉行所にでも何でも訴えてくれ。さて、そうしたところで、どっちに理があるもんかのう。証文はこつちにある。あんたは気がおかしい。お裁きで負けたら、あんたの方こそ笑いものじゃぞ。

もうお松様はお顔を赤くして玄関を飛び出されました。お帰りの道は無言で歩かれたのでございます。

それからお松様は数日思いに沈まれました。そして村役さんたちとご相談の上、とうとう意を決してご訴状をしたため、富岡のお役所の下代様げだいに野上三左衛門からの借銭の件をお訴え出になられたのでございます。その後のお裁きの込み入った進み方は私などにはわかりかねたのですが、ともかく双方の言い分がまったく相反することでしたので下代様の

もとでは折合いがつかず、結局徳島のお奉行様がじかに当られることに相成りました。それでお松様は、差添えの村役さんたちとごいっしょにお城下に出かけられたのでございます。

お奉行所でのようなごようすだったのかもよく存じませんが、お城下から戻られたお松様はすぐにもお沙汰が下るかと心待ちになさっていたのですが、田植えの済むころになりましてもいっこうそれはございませんでした。そのころどこからか悪いうわさも流れてまいりました。強欲三左が裏で手を回して、仕置奉行の長谷川様に賄いを贈って取り入っているというのでございます。その上、お裁きの役にあるまじきことですが、その長谷川様がお松様にご執心だということです。お取り調べの場で顔を合わせた時にお松様の色香をいたく愛でられ、三左もお奉行様に焚きつけたと。聞かれたお松様には腹立たしくもお胸のつぶれるようなお話ではなかったでしょうか。

そしてある朝、あの顔を思い浮かべるのも憎らしい強欲三左が、小者を一人連れて向こうからお屋敷にやって来たのでございます。玄関でお松様が向き合われると、三左は証文を手にかざして、今日が借錢返済の期日になっている、今日中に金を返せ、さもなければ五反地は明日からわしのものじゃ、と言い張ったのです。お松様は気丈に、

——借錢の件はまだお奉行所でお裁きの最中、お沙汰も下っていないのに証文にあるから五反地を奪るなどというのはおかしいことです。そんなことはなりません。私が許しません。亡き惣兵衛が許しません。

と言り返されました。でもそこで引くような三左ではなく、

——ゆうことはゆうたからな。あんたもきれいな顔に似合わず、情の強いお人じやなあ。ほれにこの家では、客人にお茶の一杯も出さんのか。しつけがなつとらんなあ。

と好き放題、捨て台詞を吐いて帰っていきました。

そして次の日、三左はごろつきのような男たちを数人連れてきてもう田植えの終わっている五反地に入り、号令して縄で囲い、畦に札を立てたのでした。お松様や村役さんたちが驚いて止めに入りました。騒ぎを知った村の衆も集まってきて口々に強欲三左の理不尽なふるまいを詰ったのですが、それでもどうにもならなかったのでございます。

そんなことがあって、ますます待たれますのはお裁きのお沙汰でした。お奉行所からはその後も二度ほどお松様にお呼び出しがございました。そのたびにお松様は泊りがけでお城下に出かけられました。ですが、どういうわけか、いっこうにお沙汰は下らなかつたのでございます。

五反地やお裁きの件はくすぶったままに月日が過ぎていきましたが、一方、その年の夏にはお屋敷には喜ばしいこともございました。旦那様亡き後、その涙も乾かぬうちに、跡目を誰が継ぐかということがお屋敷にとつても、また村の衆にとつても一大事になりました。お松様や縁戚の方々や村役さんたちがしきりに談合を重ねられたのでした。急なこと

とて話はなかなかまとまらないようでしたが、領主の樋口様やお役所からの督促もあって、数月後、ようやくお屋敷の分家筋にあたられる家重様が養子に入られることが決まったのでございます。

家重様は隣の郡の庄屋様のご次男で、まだ二十歳をいくつか出たばかりというお若さ、やや小柄な整ったお顔立ちの方で、お松様と並べられると雛人形のような好一對という人もあったほどでした。じつのところ、お松様は後家におなりなつたとはいえまだお歳は二十一つ余るばかり、この際は家重様をお松様の婿に取って跡目を継いでもらつたらどうかという話も起こり、家重様方ではそれも望まれたらしいのですが、それはお松様が固辞されたそうにございます。家重様をお迎えする前に、お松様ご自身は母屋からお屋敷内の離れの方にお移りになりました。

家重様をご両親とともに馬に乗って初めて村に入つてこられた日のご様子や、二日間続いた披露の宴のありさまは今でも目に浮かびます。お客にはゆかりのお武家様方や組村の庄屋様方もいらつしやつたのでした。村内から手伝いを頼んでおりましたが、お屋敷内の奉公人はこの時とばかりに宴の用意やお接待に忙しかつたのです。それでも一同、旦那様がお亡くなりになって以来ずっとうち沈んでいたお屋敷に久しぶりに活気が戻つてきたので気持ちの張りも出るというものでございました。お松様も晴れやかなお顔をなさつて差配やお接待にあたつていらつしやいました。

にぎやかだつた宴も果てると、翌日からはもうお屋敷は家重様中心に回つていくようになりましました。そうなるよう、お松様があれこれ差配なさつたのです。そしてお松様はしばらくの間、庄屋の公事から屋敷内のことに至るまで、補佐役としてつききりで熱心にご伝授なさいました。旦那様の働きぶりをそばで見聞きなさり、時に助けておられた聡明なお松様は、庄屋としての公事にもよく通じていらつしやるのでした。

しばらくして稲の刈り取りの時期がやつてまいりました。幸いその年は豊作で、村人たちが胸をなでおろしたのです。刈り取りの次は年貢米のお蔵への運び入れ、帳面付け、領主様のお蔵への運び入れと庄屋様としてせわしい時期が続きました。お松様や村役さんたちの補佐を受けながら、家重様はそれらの公事をつつがなくこなしていかれましました。お松様がふと嬉しそうに、家重様はまだお若いがいっかりしたお方だ、これから旦那様のよう村人思いの立派な庄屋さんになられるだろうと、私などにもふと洩らされることがございました。

ですが、その間にもいかにも無念だつたのは五反地のことでした。五反地の稔りは強欲三左がわが物として、わが村の小作を遣わして刈り取り、運んでいったのです。そしてまだ、お奉行様のお沙汰は下らなかつたのでございます。

やがてその年も師走の暮れ、二十八日は旦那様のご命日でございます。村のお寺のご住職をお迎えしてしめやかにご法要がいとなまれました。山ふもとの墓地の旦那様のお墓に

は、お屋敷の人々はもちろん、たいていの村人がお参りに伺ったのでございます。

そう、あれは次の年の春の花見も終わったころのことでございます。久方ぶりでしたが、仕置奉行の長谷川様からお松様にまたお呼び出しがかかったのです。お使いが持ってきたお書状には、くだんの一件に付き、なお不審の条あるによって当方別宅までまかりこすように、とあったそうにございます。お奉行所ではなく、ご別宅へ呼び出すというのはおかしいことで、お松様は事を家重様にも明かされてやや思案なされたのですが、断れば不利になるやもしれぬと意を決されたのでしょうか、お使いに承知の旨を伝えられたのでございます。

その朝、お松様は早くお立ちになりました。お供は二人、いつもの私と、村の百姓でお屋敷のご用も勤める次平さんでした。大川を高瀬舟で下り、岩脇という渡し場で下りて土佐街道を北へ徳島まで歩きました。あなた様もご存じの道でしょう、途中いくつもの橋のない川は渡し船に乘ったり飛び石を伝ったりいたしました。荷物をかついで次平さんが先に立ち、お松様の後に私がついてまいります。次平さんは大柄でいたって無口な若者ですが、動きはてきぱきとしております。

その日はお城下のなじみあるご縁戚の家に泊まり、次の日の朝、人に尋ねながら参りますと、お奉行様のご別宅は川沿いに入った八万という所の山すその静かな所でございます。さすがにお奉行様の威勢を見せて、お城のような高い石垣の上にきれいな瓦葺の二階家が立つておりました。私などには縁遠いことではありますが、長谷川様は殿様のご信頼も厚い藩のご重鎮、そして風流人としても有名なお方で、よくお仲間の方々と詩歌の会を催される場所がそのご別宅なのだ聞いておりました。立派な御門の前で次平さんが案内を乞うと、すぐに中間が出てきて心得顔に招き入れました。お松様は玄関から母屋に入つてゆかれましたが、私たちは門のあたりで待たされました。かたわらに丸太を切ったものがあつたのを、これに坐れと次平さんが少し動かしてくれました。

お庭にはたくさんのお楓の若葉がすがすがしく、植込みにはきれいなサツキの花もほころんでおりました。小高いお屋敷からは眺めもよく、近くは川と山、遠くは帆掛け船を浮かべた海がかすんで見えました。鳥が鳴き蝶の舞う春の陽気の中で、私は旅疲れもあつてついちよつとうたた寝をしてしまったのでございます。

でも、しんとしておりました母屋の中から、ふとわずかに叫び声が洩れてきました。お松様のお声のようでした。続いて男の怒鳴り声が。乱れた足音が聞こえて、お松様が急いで玄関に出てこられました。草履を履かれるのもどかしく、何も言わずそのまま小走りに出ていかれます。厳しい蒼白なお顔で、御髪が少し乱れておりました。あつけにとられていた次平さんと私は、急いでお後を追ったのでございます。

その日はそれからまた長い道のりを、夜遅くまでかかって三人で加茂の村まで帰ってまいりましたのですが、道中お松様はめったに口をきかれませんでした。しじゅう固いご表

情で、こちらはお声がけするのとはばかられました。お屋敷で何があったのか、私などにも多少見当がつき、お松様にご同情申し上げます。そして長谷川様の高名にも似合わぬおふるまいを怪しみ、お憾み申し上げたのでございます。

驚かされましたのは、それまで一年以上も長く滞っていたのにもかかわらず、それからわずか数日後にまたお城下の奉行所からお呼び出しがあり、お沙汰が下ったことでございます。お松様のお訴えは却けられました。そればかりか、お白州でお松様は故なき訴訟を起こしたかどで長谷川様から厳しいお叱りをお受けになったそうにございます。

その日のうちに村にお戻りになったお松様は、出迎えの家重様や村役さんたちを前にさすがにご無念そうなお顔でお沙汰についてお知らせし、板の上に坐られ、皆様にはせつかくこれまで多大なお力添えをいただいたのに、わが力不足で、まったく申しわけない仕儀に相成りましたと深々とお辞儀をなさいました。そしてそばに寄ってきた三毛をお抱きになると仏間に入ってゆかれ、長い間出ていらっしやらなかったのでございます。皆は口々に嘆き、強欲三左を難じ、そしてお力落としのお松様を案じたのでした。強欲三左がお裁きにほくそえんだことは、見なくても目にありと浮かびました。

あれからもう何十年も経ちましたので、今だからはばからずに申せるのですが、あれは私などの目にも何としても理不尽なお裁きでございました。ことの黒白は初めからはつきりしていたものを、お奉行様は強欲三左からの多額の賄いを袖の下に収めた上に、お松様をわがものにしようとしてはねつけられ、その腹いせにあのようなお沙汰を下されたのでしよう。いえ、これは私ばかりではなく、お屋敷の人々も事情を知る村の者も皆、心のうちにそう思い、わかっておりました。でもお上を難ずるのはご法度、当時も、それからの長い年数も、心には思えども大つぴらには口に出せなかつたのでございます。

当時のお松様のご落胆、ご無念はいかほどのものだったでございましょう。でもその後のお松様のおふるまいはまたしてもご立派でした。さすがに二、三日はお仏間やご自分のお部屋に閉じこもっておられたのですが、その後はもう何ごともなかったかのように常の明るいお顔をお見せになり、家事の差配や家重様をお支えするお仕事に精を出されたのでございます。強欲三左やお裁きのことともういっさい口になさいませんでした。あれも、お武家式のいさぎよさというものだったでしょう。おかげで家の者たちも感化されまして、しだいに暗い気持ちを払ってまたそれぞれの仕事に勤しむようになったのでございます。でも、お松様がそのお家の一大事をお忘れになったり、忘れようとなさったりしていたのではないことは、後々のおふるまいでよくよくわかつたのでございます。

五風十雨と申しますが、その年も前の年に続いて雨は降るべきに降り、日は照るべきに照り、夏から秋の大風さえなければ秋には豊かな稲の稔りが見込まれました。お屋敷の田も、五反地という一等地こそは失われたものの、山すその畑地を広げていくらかは補なおうとなさっておられました。私ども奉公人は、そのころ田畑の野良仕事にもよく出たもの

でございます。

家重様がお屋敷に落ち着かれた後、お屋敷としての次のお大事は家重様のご婚姻でございました。お齡は家重様とさほどちがわずとも親のお立場のお松様は、そのことにもたいそう気をお配りになりました。そしてお世話くださる人があつて、さほど月日をおかずにお相手が決まりました。その年の秋、家重様のお屋敷入りから一年余り経つてお屋敷で行われましたあでやかなご婚礼は、お裁きのご不運を打ち消すような慶び事でございました。

ご新婦は同じ郡内の庄屋さんのお嬢様で佐江様といわれ、どこかおっとりとしておられました。お松様は佐江様に内向きのことをやさしく伝授なさいました。いずれは家重様と佐江様ご夫婦にたいていのお屋敷のまかないは任せられ、ご自分は退こうというお考えがおありになったようでございます。ご成婚の翌年の秋にはもうかわいい若様がお生まれになり、その二年後の春にはきれいなお嬢様がお生まれになり、お屋敷はお仕えしている私どもにとつても嬉しい、晴れがましい慶び事が続いたのでございます。お松様はお若くしてもう祖母のお立場になられたのですが、お家の後継ぎとなるお二人のお子様方をそれはもうおかわいがりになりました。

そのころお松様は、勿体なくも私の身の上についてもご心配くださったのです。お屋敷にご奉公に上がってから六年目の秋のことでしたが、私は十九で次平さんと祝言を挙げ、お屋敷を出て村内の小家でいっしょに暮らすようになりました。私はそこから毎日お屋敷に通い、次平は小作をしながら折にふれお屋敷のお仕事も任されました。祝言が挙げられたのも、何とか二人の暮らしが立てていかれるようになったのも、すべてお松様のおかげでした。私のようなものをずっと妹のようにお氣にかけてくださったので、そのことだけでも私は今もお松様に足を向けて寝られないのでございます。

歳がいくたびか回るうちに家重様がお若いけれども庄屋様らしくなられ、佐江様も家事に慣れられ、ご夫婦仲も円満でかわいいお子たちもすくすくとお育ちになる。それをおそばで微笑んで見ていらつしやるお松様にはもう何のご不満もおありにならないだろうと傍目には映っておりまして。それは、敬いお慕いしていた旦那様に先立たれ、お若くして後家におなりになったのは何よりのご不運で、折にふれ私などには旦那様との昔をなつかしまれるようなお話を洩らされることはございましたが、かといってそのことでふさぎこまれるようなことはなかつたのでございます。あの凜としたお姿でご家族やまわりの者には幸せをお与えになり、ご自身のご不幸は黙って耐え忍ばれるお覚悟をもつていらつしやるという、まことによくできた気丈なお方ではありました。

でも結局、お松様は、お心の深い所は長い間、身近にお仕えしていた私にも、誰にもお隠しになっていらつしやつたのでした。おそらくはあのお裁きのころに早くもご決意なさり、でもそれはお心のうちに深く秘められながら、青い小さいな柿の実がだんだん太つて稔つていくように、時機が熟してくるのを待つていらつしやつたのだと思います。

ようやく、あなたさまもご存じのあの事件のてんまつをお話する段になりました。ただ、今から申しますことはこの私めの目に映ったばかり、耳にしたばかりのことでございまして、まちがいの混じり不足のこともあるうかと存じます。何しろ、もう毫碌いたしておりますので。このごろは、孫たちの名前ですら時折忘れるほどでございますよ。

あれは歳もあらたまつたばかりの、月も満ちる小正月の前の日のことでございます。お松様が徳島のお城下のご縁戚の家に向かかれるというので、私はまたお供を仰せつかったのでございます。ご用の向きはとくにおっしゃいませんでした。私は明日が小正月なので、お城下には何軒かある新しいお宅に新年の挨拶回りをなさるのだろうと思いましたが、それにしても旅支度を整えられたお松様のお顔が異様に張りつめておられたのがふしぎではありません。荷も少なく、供も私一人というのも常とちがいました。ふしぎといえざご出立の時、いつものように門の外まで追ってきた三毛がひどく鳴いたのです。お松様はいつになく三毛をきつくお叱りになって追いつ返されました。

それでも高瀬舟の上に着かれると、お松様のお顔もやわらぎました。空気はまだ冷たいが日差しが明るく、人家の庭や畑の中に梅の花がちらほら見えておりました。慣れた竿さばきの船頭さんが上機嫌でさびのきいた舟歌を聞かせます。私は浅はかにも、お松様にお供する上に正月のお城下を見物できる楽しみで多少は浮かれています。

また岩脇の渡し場から陸に上がり、長々と北へと続く土佐街道を歩きました。道中でお松様とお話した中身はもう忘れましたが、ただ一つ憶えておりますのは、お松様が私に次平との暮らしぶりについてお訊ねになったことでした。私は日ごろのようすを二つ、三つ申したかと思いますが、新婚からまだほどもなく、顔の赤らむ思いでした。お松様は微笑まれ、そして、おまえは利発でよく気が回るし、次平も無口だが情があつて仕事もできるしつかり者だ、二人で末長く仲よく暮らすようと、ふだんよりも力を込めておっしゃったのでございます。

夕暮れ近くにお城下のご縁戚のお宅に着きました。亡き旦那様がお城下に用がある折は定宿になさり、亡くなられてからもお松様が泊まられたり文のやり取りをなさったりしている近しいお宅でございました。その夜は遅くまで、お松様はそのお宅のご主人様と話しかんでいらつしやいました。

翌朝、どこかに出ていたお使いの方が戻ってきた後、お二人はその方と小声で話しておられました。昼前にお松様はお借りした部屋でお身体を拭かれ、お着替えになられました。張りつめたお顔で、お屋敷から持参してきた白無垢のお着物を中に着こまれました。その時になつてさすがに私もこれから何ごとか大事があるらしいとは察しましたが、お松様はまだ何もおっしゃいません。

そのお宅を辞したのは昼を過ぎてからでした。ご主人様がうち沈んだお顔で門の前に立つて見送られるのに、お松様はわずかに笑みを浮かべて丁重に札を返されました。お使い

の方が先導してください、何か人目を忍ぶように小道を東へ歩き、南に折れ、半時ばかりで土佐街道に出ました。そこをまたしばらく南の方に歩きました。春とはいえ、その日の空は一面に曇り、しんと冷えて時々小雪が舞っておりまして。小正月の日で、寒気に凍えて堅そうな道を、時々晴れ着を着た人々が行き交いました。馬や駕籠で行く人もあります。鎮守の森には人が集まり、とんどの火の上がるのが見えました。

ある所に来ると、先導の方の足がびたりと止まりました。このあたりがよろしいかと、とお松様に頭を下げながらおっしゃいました。お松様はあたりを見回してうなずかれ、礼を述べられ、紙に包んだものを手渡されました。その方は一札して踵を返されました。

急に女二人だけ取り残された感じがいたしました。松の木の下に菅笠をかぶったお松様がたたずまれ、そして初めて私に大事を明かしてくださいました。

——お里や。これから私の言うことをよくお聞き。私はこれから、三年前に受けたお裁きに不服の条を、お城のお殿様にじかに申し立てるつもりです。お書状をしたためてまいりました。この胸にあります。これを、今からこの道をお通りになるお殿様にお渡しします。お殿様はお鷹狩からお戻りになる途中です。びっくりしたでしょう。でもお里や、おまえは何も心配しなくてよいのです。少し離れた所に隠れて潜んでいなさい。そしてそこから私のこれからのふるまいをよく見届けるのです。見届けたらその足ですぐに加茂に戻りなさい。そして見たこと、あったことをありのままに、旦那様や村役さんたちに申しなさい。いいですね。ご苦労ですが、私にはもうおまえだけがたよりなのです。

凜と張った目で私の目を見ながら、抑えたお声でお松様はこんなふうにおっしゃったのです。聞いても私にははじめ、お松様が何をおっしゃっているのか、よくわかりませんでした。でもはつと腑に落ちると、たちまち身も心も凍りつきました。

お松様の真剣なお顔、内に着こまれた白無垢。お松様は死を覚悟しておられるのだ、そうわかったのです。すると凍りついた身が今度は震えだしました。お松様はもう一度私のなすべきことをお教えくださったのですが、もう半分も耳に入りませんでした。

この三年の間、お松様はご決意をお胸に秘められ、機が熟すのを待っていらっしやっただ、ご自分の命をかけて三左の非道を暴き、お裁きの間違いを正し、旦那様の名譽を守りなさろうとおつもりなのだ、でもお殿様への直訴はご法度のはず、うまくいくはずがない、お松様はこの場ですぐに斬り殺されてしまうのではないか、白無垢が血に染まるのではないか、私はそんなことを思つて恐ろしかったのです。

お松様はまっすぐな街道の先の方を見ておられました。私はおそばにいて、息がつけぬほどどきどきしておりまして。冷たい風に小雪が舞い、身も冷えてまいります。時々道を行く人たちのようすがいかにも呑気そうに見えました。お松様が、目の前を子供連れの晴れ着の家族が過ぎてゆくの見送つて、ふと、

——お里や、大野の村での子供のころのお正月が思い出されますねえ。あのころは何も思

わず、無邪気で楽しかった。

と洩らされました。また遠い目をなさって、

——人の運命というのはわからないものですね。今まで生きてきた間のことが、すべて夢だったような気がします。

とも。

そうして小半時も経ったでしょうか、二町ほど先の林の陰からお侍の姿が何人か現れました。騎乗の人たちもいます。そしてその後にお駕籠が続いているようです。

それを認めるや、お松様は上着と菅笠を脱いで私に預けられました。そして私にすぐに離れるようにおっしゃいました。私の身に咎が及ばぬようにそうおっしゃるのだとわかりました。私はふらふらと、街道から離れてとある百姓家の垣根の陰まで退きました。腰のあたりの力が抜けて立っていられません。でも、すっかり見届けよとお松様に命じられたので、目と耳だけは凝らしました。

お駕籠を取り囲んで、四、五十人ばかりのお行列が進んでまいります。通りがかりの何人かが、道脇にひれ伏しました。白無垢のお松様もそうなさいました。お侍たちの一歩一歩の足音が、私の心の臓にまで響いてくるようでした。どうなるのか。できれば何ごとも起こらずに行列はそのまま過ぎ去ってほしい、そう願いました。

ああ、とうとうお行列がお松様のところまで来ました。朱塗りの立派なお駕籠がお松様の前を通り過ぎようとする時、お松様が四、五歩前にいざって進み、声を挙げました。「申し上げます！」。もう一度高い声が聞こえました。はっと行列が止まりました。侍たちがすぐにバタバタと駆け寄ってお松様を取り押さえました。お駕籠を取り囲み、刀に手をかけている者たちもおりました。馬上から鋭い呵責の声が飛んで、そのお侍が馬から飛び降りました。お松様は肩のあたりを押さえられながらも、ひれ伏したままで書状を両手でかかげ、お駕籠に向かつて何か訴えられました。すると急にお侍たちが、地に膝をつきました。

お駕籠が地に下ろされ、扉が少し開き、きらびやかな着物の端がのぞきました。中の方の声は聞こえませんが、お松様との間で少し問答があったようでした。

でもお駕籠の扉はまもなく閉じられました。お松様は侍に腕を取られ、立たされました。お行列がふたたび動き出しました。その尻について、お松様は腕を取られたまま、足軽二人に引き立てられていきました。ただ一人白無垢のお松様がお寒そうで、私は上着だけでもお届けしたいと思いました。いちだんと激しくなってきた雪の中に、お行列は消えていったのでございます。

私は腰が抜けてしまっただけでしばらく立ってないでおりました。でもお松様のお言いつけがございます。立ち上がると街道を南へ、一心不乱に加茂の村へと急ぎました。途中の道や村里のようすなどほとんど覚え、なんとか加茂にたどりつきましたのはもう夜でした。着物を汚し、髪も乱したままお屋敷に飛び込みましたので、家重様はじめお屋敷の人たちが

驚かれたのはもちろんです。家重様は真剣なお顔で、まずお松様の身がご無事かどうかとお訊ねになりました。お直訴のことはあらかじめお松様から聞いておられたのでしょうか。私は碗の水を一杯いただいた後、まだ息も収まらないままに、懸命に見てきた限りのお松様お直訴の顛末をお伝えしました。家重様はいくつか私にお尋ねになった後、すぐに村役さんたちを集められました。そして夜更けまで話し合っておられました。

それから数日、うわべは何ごともなく、加茂の村は静かでした。でもお直訴のことはどこからか洩れて村じゅうに広まりました。家重様は次平ともう一人を使いとして、お城のようすを探りに行かせました。お城下のご縁戚のお宅からは文が二、三度届いたようでございます。そして、お松様はお城の牢内に留め置かれているがまだご無事だということが伝えられました。

そして皆の嘆き、案じている中、お松様は、四日の後、村にお戻りになったのでございます。富岡のお役所からお松様ご帰還のお知らせがあらかじめ届いた時、お屋敷の人たちはもちろん村の衆は皆喜びました。お上のご寛大なご処置が下されて、お松様が赦されてお戻りになると早合点したのです。でもそうではございませんでした。なお取り調べ中につき、沙汰を下すまで村預かりとする、というお達しだったのです。

昼近くに、お役人様に連れられてお松様はお戻りになりました。家重様や村役さんたちが出迎えました。お松様は少しおやつれになったようでしたが、お顔つきやおふるまいはしつかりしておられ、皆は一安心したのでございました。

村預かりの身の上とはいえ、お松様は以前のとおりお屋敷の離れにお住まいになり、村内なら外出もできたのでございます。とはいえ、いつになるやらわからぬお沙汰を待つお身の上、まわりの者たちは気が気でなかったのです。家重様や村役さんたちは何度も頭を寄せてはあれこれと話しこまれました。洩れ聞きましたところでは、お殿様への直訴は罪ではあるけれども死罪になった者は少ない、他国の例でもそうだ、ましてこのたびはお訴えの中身を斟酌すればご寛大な処置になるはずだ、と望みをかけていらつしやったようでございます。村役さんたちや組村の庄屋様たちが連署して、お松様の罪を軽くしてくださいるようにとの嘆願書を徳島のお城にお届けしたとも伺いました。

そのころの日々、お松様ご自身はというと、以前に変わらずおだやかなお顔をなさって日を過ごされました。成すべきことをどうとう成し遂げたというご安心と、その上はもう我が身はどうなるうとかまわぬというお覚悟がおりになったようにお見受けいたしました。それは、ご訴状によりお殿様にご不審をお持ちになり、お裁きが覆ることをご期待なさってはおられたのですが、でもそのようなことはお口になさいませんでしたし、お焦りになってもおられませんでした。

ご謹慎のお身の上ゆえ、公事や家事からも身を引かれ、地味なお着物を召されて静かにお暮しでした。お暇にまかせて村内や大川の川原をお歩きになりますので、佐江様や私も

できるだけお供をするように努めたことでもございました。ただ一番のお供はやはり三毛で、外出の時も嬉しそうについて歩くのでした。

お松様が川原の石に腰かけられ、さあさあと行く青い流れを見つめながら、こんなふうにしみじみとおっしゃったことを憶えております。

——お里や。こうして山や川を見てみると、人というのは小さなものだとつくづく思いますねえ。

その春もやがて里のあちこちに梅の花が開き、それが散ると川の両側の山や八幡様の境内に桜の花がほころび始めました。お松様は桜の花がことのほかお好みで、お目を細めて愛でられながら、

——桜の花は誇って咲いて、でもすぐに散って、人の生き死にを思わせませぬえ。でも人のほうがはかない。花は春ごとによみがえるけれど。

そんなふうにお洩らしになったこともございました。

そうして何ごともないままに二月ほどが過ぎてゆきました。もしかするとお直訴の件はお城のほうでも重くは扱われず、このままご赦免ということになるのではないかと、お屋敷の人々は勝手な望みをかけていたのでございます。

ところが、それは嵐のような雨風の日でもございましたが、お奉行所の下代様が足輕を連れ、馬に乗ってものものしくやって来られたのでした。そしてお松様を呼び出し、死罪を申し渡されたのでございます。しかも刑は一日置いて明後日の夜に執り行うというのです。静かだったお屋敷は、急に雷に襲われたように騒然といたしました。

その時から、離れはさながら牢屋と化してしまいました。棒を突いた足輕が前に立ってお屋敷の人々も近づけなくなりました。私は朝と夕に離れにお膳を届けたのですが、それもしかにお松様にお渡しすることはできませんでした。閉め切った板戸の向こうで一人ひっそりしておられるお松様を思うと涙がこぼれてしかたがありませんでした。下げられてくるお膳のものは、飲み物以外、ほとんど手がつけられておりませんでした。急を聞いてあちこちから親類縁者の方々もお屋敷にかけつけてこられたのですが、お松様にお会いすることはもちろん、お姿を見ることさえ許されませんでした。

異様にひそまって人々は会話もまれに、ぴりぴりした中で昼と夜とがまわり、とうとうその日になってしまいました。私などの目には、大川や里を照らす朝日の光がその日ばかりは蝕の日のように禍々しく感じられ、山の桜も薄墨色に眺められました。もう私は、一心に神仏におすがりするほかありませんでした、どうぞどうぞただ今お奉行所から急使がやって来て、本日の処刑は取り止め、松は無罪放免とするというお沙汰が下りますようにと。でも午後には予定通り郡奉行所からお役人様一行がご到着になり、母屋の表の間に陣取られました。家重様はじめお屋敷の人々は涙をのいっつお接待につとめねばならず、お屋敷はまたに騒々しくなりました。

家重様は下代様のお許しを得て、私にお松様の最後のお世話をしようお申しつけになりました。それで私はやつと離れの中に入り、お松様にお会いできたのでございます。兩戸を立てまわした小暗い中に入りますと、まず二つの目が鋭く光って怒ったような鳴き声です。行方知れずと思っておりました三毛は、ずっとお松様のおそばに侍っていたのでございませぬ。白いお顔のお松様は念珠を手にされ、西向きに坐っていらつしやいました。さすがにお弱りになつていられるのではないかと心配申し上げていたのですが、でも私を見てやわらかに微笑まれました。私は涙を流しながらお松様のお着替えを手伝い、御髪を整えさせていただきました。お松様は多くはおつしやらず、「お里や、ありがとう。お前にはずつと、ずいぶんよくしてもらいましたね」と一言つぶやかれました。私はもうお松様の足もとにおすがりして、よよと泣くよりほかなかったのでございます。外からは、すぐに退出せい、とくり返すお役人様の非情なお声でした。

禍々しくもあわただしい中に、春の長日も空を赤く燃やして暮れてゆきました。風もゆるく、ふだんなら心地よい春の宵なのに、お屋敷の中はびんと張りつめておりました。人の出入りは多いのに、静かでした。たがいに顔を突き合わせても、笑いも言葉もないのです。

その後になすぐ青い闇が寄せてきますと、離れの前には松明が焚かれました。おのずと家重様ご家族や縁者の方々が離れのほうに集まりましたが、番のお侍は厳しい顔つきで入口に近づかせてはくれませぬ。

屋根に上った三毛が鳴きやみませんでした。藁屋根の端っこに立ち、常とはちがって左右に首を振りながら身も世もないように激しく鳴くのです。訴えているようでもあり、怒っているようでもありました。

対岸の山の上の方が明るくなり、東の空に月が上りました。ちやうど弥生の望の日で、やがて大川の川面も明るみしました。お役人様や足軽たちの動きが慌ただしくなりました。とうとう離れからお松様が連れ出されました。篝火と月に照らされるお松様。髪を下ろされた白無垢のお姿。そのお顔はこわばりもせず、どうかすると少し笑みを含んでいるようにも見えませぬ。こんな時にまでお美しさが際立つのは悲しいくらいでした。取り巻いた人々から「お松様！」と次々に声が出て、それが泣き声に変わって高まりました。

提灯持ちが先に立ち、お松様はお役人と足軽の間にはさまれて歩かれました。門を出たところで、お松様は立ち止まり、お屋敷と人々に向かって深々と礼をなさいました。また泣き声が高まりました。お役人が促し、一行はまた進みます。その後ろに縁者や屋敷の者たちが従うので、おのずから行列ができました。私も後尾につきました。お松様のそばを三毛が離れずついてゆきますが、咎める者もありませんでした。道のあちこちに村の者たちが幽霊のように立って、手を合わせておりました。一行が過ぎると彼らも後に続きましたので、行列はしだいに葬礼の時のように長くなつたのです。道も人の顔も白々とした

光が照らして、お松様も行列ももうこの世のものでないように思われました。

長の大川に加茂の流れが落ち合うあたりが加茂の川原です。そのひと所に篝火が明々と焚かれておりました。近づくともう床几には下代様が坐り、足軽たちが守っております。少し離れた所に筵が敷かれておりました。先導のお役人は下代様に一礼し、お松様をその筵まで連れていきました。つき従ってきた人々はもうしかたなく少し離れてその場所を取り囲みました。そこそこからの泣き声が止みません。いったん誰かの口から念仏が出ると、すぐに念仏の合唱になりました。お役人様方にもそれは止められなかったのでございます。

お松様はゆっくり一礼して草履を脱がれ、筵の上に坐られました。端座するとじつと下の方を向いておられました。でも三毛がお松様のお膝に上がって離れようとしません。お役人が、「誰かこの猫をどけよ！」と怒鳴りました。私は泣きながら走り出て、三毛を抱きとって下がりました。

それからの一場はすべて夢の中のできごとのようなものでした。春の宵、満月、川原、篝の火、お祭りでもないのに集まった人々の群れ。下代様が一言、そばのお侍に告げました。たすき掛けをした役のお侍は、一札すると抜刀し、お松様の方に近づきました。刃に篝の火が燃えました。まわりからまたいちだんと、嘆きの声と念仏の合唱が入り混じって高まりました。役のお侍が刀を高く構え、お松様を見下ろして一声かけました。お松様はお身体を心持ち前に倒されました。下には川原石をどけて首穴が穿たれております。その時でございました、三毛が私の胸を蹴って飛び出し、走ってそのお侍に飛びかかっていったのです。あまりの勢いで、不意をくらったお侍は腰砕けになったようにたたらを踏みました。足軽の一人が出てきて、三毛に向かって小刀を抜きました。三毛は逃げようともせず、その男をにらみつけ、齒をむいて喰りました。次の瞬間、三毛は血を噴きながらお松様のおそばに倒れたのです。

その後のことは、申すもおいたわしいことでございます。その時は、私の中では地が震え大川が裏返りました。

葬りは勝手、なれど罪人としての分をわきまえよ、との下代様のお達しでしたので、家重様やお寺のご住職が相談され、お亡骸はお棺に入れていったんお屋敷の内に運ばれたのでございます。そして次の日、お寺の墓所ではなくて今の山すその畑の所に運ばれ、葬られました。お上をはばかって葬列は縁者や奉公人ばかりという寂しさでしたが、村人たちは誰も彼も家の庭や道端や田の畔に膝をついて涙ながらにお送り申したのでございました。

直訴というこわいご手段に出られたお松様、でもお訴えは斥けられ斬首の刑に遭われたお松様は、今わのきわ、さぞご無念であられたことでしょうか。死罪という大罪は由緒あるお屋敷の家名を落とすことにもなってしまったのかもしれませんが、でも、村人たちの思いはまるでちがったのです。どちらが正しいか、悪人は誰なのか、村人たちはよく知っています、ただただお松様にご同情申し上げ、邪悪を憎み恨んだのです。もちろん私もその一

人でしたが、ただずっとおそばに近しくお仕えた私の目には、お松様ご自身は川原の筵の上で月や篝火の光を浴びながら、落ち着いた澄んだ心でいらっしやったように見えました。悪を憎み恨むというよりは、そういう悪心も善心もまじりあう世の人のいとなみというものを、いちだん高い所からご覧になっていたような気がしてならないのです。あれから年数を経るごとに、そんな思いがだんだん強まるのでございます。

葬りの後もおおっぴらにお松様のお墓にお参りすることははばかられましたが、それでもお墓には新しいお花が絶えなかつたのでございます。非業の死を遂げられたお松様の御霊をお鎮めし、成仏を願う人々が多かつたのです。ふしぎなことは、いつのまにかお松様のお墓のかたわらに小さく土が盛られて、三毛のお墓とされたことでございます。ご生前はお松様ご自分のお子同然にかわいがられ、三毛もお松様から離れず、あの時もお松様を守ろうとお侍に飛びかかつていった三毛を、誰かが憐れんでそうしたわけでしょう。それを私めのしわざという人もありますが、さてどうでございませうか。

これは私には信じにくいことですけれども、年月を経ていくうちには、その三毛が恐ろしい変化になって現われ、お松様の仇を討つたという話がひそやかに語られるようになりました。たしかにあの隣村の強欲三左は数年のうちに気の病にかかつて苦しみながら死に、お松様を裁かれたお奉行の長谷川様も晩年は病がちだったようでございます。そればかりでなく、その後も両家は不幸続きだとも聞いております。ご存じでしょうか、私も一度参りましたあの長谷川様のご別宅の地所には、近ごろお松様と三毛の御霊をお鎮めするための祠が設けられたそうではございませんか。

はあ、そんな御霊の崇りのようなうわさが広まったからでしょうか、お墓にお花や線香を手向けに来る人がだんだんにふえてまいりました。このころではお松様と三毛を何か霊威ある神様のように崇めてお供物を供え、願掛けをして行く人たちもおりますよ。

はあ、私はそんな不気味なうわさはどうでも、お墓にお参りするたび、あの世でも三毛といっしょにいられてお幸せですなえとお松様に話しかけるのでございます。